
美しい手を持つ男

マイペンライエリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい手を持つ男

【Nコード】

N7541N

【作者名】

マイペンライエリー

【あらすじ】

ある陶芸家との出会い　そして突然の失踪

わたしは彼を捜し出すが

それは彼の心の秘密を知る旅になったのだった・・・

他サイトと重複掲載を行なっています。

指が長くて 爪もきちんと整えて

ふしくれだった関節じゃなく

毛むくじやらでもなく

なめらかな皮膚に 血管が透けて見える

そんな手の持ち主がいた。

彼は陶芸家だった。

彼が創る陶器には 彼の魂が宿っているかの様に

繊細に見えながらも芯の強いエネルギーが焼き込まれていた。

彼が土を練っている後ろ姿が わたしは好きだった。

薄いTシャツに透けて見える肩甲骨の動きがSEXYで

それを見るのがひそかな楽しみでもあった。

時間をかけて練り込んだ土は やがてすべすべの
適度に水分を含んだ粘りのある土に変貌してゆく。

そして成形。

その細い指でただの土から物の形に変えてゆく様は
まるで目の前で魔法を見てるような錯覚を起こさせた。

彼はいつもわたしに 一緒に創ろうと誘ってくれたが
わたしは彼の創るのを見てるだけで幸せで 一緒に作品を創ったこ
とはなかった。

素焼きが終わって焼き締められた物に 釉薬をかける。

彼の綺麗な手で慎重に幾度も重ねて塗られた作品は
結婚式場の控え室の花嫁のように

神妙な顔をして並んでいた。

本焼きが終わり 何十という作品の中から

彼はたったひとつ（もしくはは なにも選ばないこともあったが）
選り出し

それ以外は全て壊した。

それは冷徹な潔さで 容赦なかった。

完成した作品を手に 彼は目を細める。

彼は遂に愛しい人と巡り会えたというような眼差しで 作品を見る
のだが

その時ばかりは わたしの入り込めない彼だけの世界があった。

わたしはそんな空間が好きで足繁く作業場に通った。

彼はわたしが突然行っても いつも穏やかな笑顔で迎えてくれた。

わたしはほっこりとした彼の世界に癒されて　また日常に戻るのだ
った。

けれどわたしの仕事を立て込んで彼の作業場に行くのが間遠くなり
いつしか彼との連絡も途絶えていった。

夏の終わり、わたしはやっと時間が取れて彼の作業場に車を走らせ
た。

そこに到着して　わたしは息をのんだ。

彼が丹誠込めて創った窯はどれも潰れ　崩れ落ちていたのだ。

彼の姿はどこにも見当たらなかった。

わたしは必死にツテを頼って彼を捜した。

半年も経っただろうか 彼は道北のある町にひとり暮らしていると友人から知らされた。

わたしはすぐに彼の元へ向かった。

彼は昔の面影も無い程 やつれ憔悴しきっていた。

彼は作品を創れなくなったと ぽつりと言った。

その理由はわたしの想像以上に過酷なものだった。．．。

彼は小さな声でつぶやく様に話し始めた。

「筋肉が少しずつ動かなくなる病気なんだ。そのうち寝たきりになる。」

陶芸をしている時から病気は発症していたというがわたしは全然気が付いてなかった。

今の彼の病状はかなり進んでいて いずれ自己呼吸も出来なくなるであろう事を彼は淡々と私に話した。

「治療は？ 進行を止める薬はないの？」と聞く私に 彼は

「ここまで来たらあまり期待出来ない。」と哀しい笑みを浮かべて言った。

「体がまだ動けるうちは自宅にいるが 遅かれ早かれ入院になるだろう。」と。

わたしは瞬きを忘れて目を見開いたまま彼を見つめた。

だって彼は今、ここに生きている。

熱く赤い血が流れる彼は私の目の前にいるのだ。

わたしは何も言わず彼の肩を抱きしめた。

彼の暖かい温もりは哀切となってわたしを一杯に満たし 堪えきれなくなつたわたしは 「なぜ、あなたなの？ あなたが何をしたい

うの？」と叫んでいた。

彼は ゆっくりと私の腕を自分から解くと言った。

「私にはもう何も思い残す事はないんだ。残りの人生を静かに全うする覚悟はとづくに出来ている。強いて言えばただひとつお願いがある、私の声の出る限り私の半生を語るのを聞いてくれるだろうか？」

涙を拭いてわたしは頷いた。

彼は 目を閉じて自分に言い聞かせる様に静かに話し出した。

「私はピアノ弾きだった。

巷ではピアニストなどと洒落た呼び名で呼ぶが 私の場合はピアノ弾きというのが一番自分に似合っていると思っている。

そこそそ有名になって海外演奏にも招待されたし、何カ国もまわっ

てコンサートも開いていた。

日本に帰るのは年に1、2度くらいだったかな。

結婚？　結婚もしたよ。

同じ音大の2つ後輩だった。

とても繊細な心を持った女だった。

彼女はヴァイオリンを専攻していて海外への演奏旅行にも行っていたが、私と結婚してヴァイオリンは止めてしまった。

本来家の中にいるのが好きな女で　海外への演奏旅行は精神的に疲れてこれ以上出来なくなったと言うんだ。

私は自分の演奏旅行のスケジュールが一杯で妻の悩みにきちんと向き合う事が出来ないまま、結局決断は妻に任せ旅に出た。

妻は私と一緒に日本で静かに暮らしたかった様だったが、名声に心奪われていた私は妻を日本に残し、精力的に演奏旅行をこなしていた。

妻はだんだん気分が沈み込み　私に海外に行くのを止めて欲しいと言う始末だった。

私は同じ音楽家として　何故私の事を理解してくれないのだろうと不満が募っていった。

そして少しずつ妻と私の間には亀裂が入っていった。

そのうち息子が生まれ 妻は宝物を慈しむ様に一生懸命育児をした。

私は無責任に 妻の寂しさや不満の矛先から逃れる事が出来てほっ
としていた。

妻の本当の寂しさを理解しようとせず、子どもという玩具を与えて
いれば大人しくしてくれるだろう等と考えていたのだった。

それ位 家庭の事に関心がなかった。

ひどい夫だった。結婚する資格などなかった。

演奏旅行で時には半年も家に帰らない時もあった。

妻からは時折手紙が来ていたが 家庭の状況を知る情報としか考え
てなかったので返事もいい加減なものだった。

それでも妻は子どもの成長した写真を折りある毎に送ってくれた。

私は妻と子どもが元気で暮らしている事で満足していた。

私の収入はかなりのものだった。その収入で養っているのだから誰
にも文句は言わせない、父親が単身赴任の留守家庭というものはそ
ういうものだと思っていた。

ある日 息子は昼寝中に突然死んだ。

乳幼児突然死症候群だった。なかなか昼寝から目を覚まさないの
心配になって子供部屋に行ってみると もう冷たくなっていたそう
だ。

妻は錯乱し泣き崩れた。その時私はドイツに滞在していた。

関係者から連絡があり、私は急遽帰国した。

私の顔を見るなり妻は床に手をついて泣いて謝罪した。

「わたしが付いていながら、こんな事に・・・」後は言葉にならな
かった。

私は妻の肩を抱き起こそうとしたが、その時床に血が大量に流れて
いる事に気が付き愕然とした。

妻の両手首は赤く染まっていたのだった。

息子の死を受け入れられず妻は精神のバランスを崩してしまったの

だった。

命だけは取り留めたが 妻は暫く入院を余儀なくされた。

私は一人で息子の葬儀を済ませた。

一緒に暮らした期間は短かったが息子の遺品の中にピアノの玩具があり、それを片手で弾きながら涙が溢れて止まらなかった。

こんな私にも親の情はあったんだよ。自分でも吃驚したけどね。

暫く入院して妻は退院したが とても一人で生活出来るとは思えない程憔悴していた。

妻はもう一人子どもを下さいと私に乞うた。しかし今の状況で育児が出来るだろうか。

私は妻の体調が戻ってから考えようと言った。

その次の朝 妻は姿を消した。

搜索願を出し探したが 手がかりは見つからなかった。

私はストップしている演奏旅行も気になっていた。関係者に多大の迷惑を掛けてしまっている。

私の音楽家としての信用も失墜しようとしていた。

1ヶ月後 妻は一度も行った事の無い山の中で冷たくなって発見された。

自ら命を絶ったのか 道に迷ったのか今となってはわからない。

私は一度に二人の愛しい家族を失ってしまった。

愚かにも 最悪の事態になってからやっと 私の罪深さに気付いたのだった。

喪失感の中で妻の悲しみを考えると 今更ながら私の冷酷な仕打ちがどれほど妻の心を痛めつけていたのだろうか、後悔の念に苛ま

れた。

許しを請う人はもうこの世にいない。

ある日私はもうピアノが弾けない自分に気付いた。

どうしても鍵盤を触れないのだ。蓋を開ける事が出来ない。

そこが妻の聖域のようで 私が触れる事で 妻や子どもの存在を汚してしまう事など決して出来ないと思い込んだ。

音楽を聞く事すら出来なくなった。

当然音楽家としての生命はついでてしまった。」

彼は弱く咳き込んだ。

彼は話を続けた・・・

「私は何も手に付かず、日の出で目覚め日の入りで眠るという毎日を情性で過ごしていた。

音楽家の仲間が声をかけてくれたが、私はもうピアノを弾く気力が失せていた。

そのうち一人また一人と連絡をくれる者はいなくなった。

私にはかえって好都合だった。

誰にも干渉されず妻と子の魂を吊っていたかった。そのまま私も消えてしまいたかった。

ある日 私のもとへ小包が送られて来た。

送り主に心当たりはなく、藍海窯と書かれてあった。

暫くそのまま放って置いたが、ある日のろのろとその包みを開けた。

何重にも包まれている最後の紙を開けた時、私は心臓を掴まれた様に息苦しくなった。

そこには悲しいくらいの深い青の陶器があった。

添えられていた1枚の手紙には「奥様の作品です。工房にまだ残っておりましてので送付させていただきました。当窯は閉鎖する事になりました。」とあった。

妻は音楽を止めてから陶芸で自己表現していたのだ。

それにしてもなんて美しい青だろう。

寂しさが全て溶け込んでいるような妻の涙の色だ。しかしそこには妻の温もりも確かに残されていた。

私はその作品を胸に抱き声を出して泣いた。

次の日私は その藍海窯に向かった。

そこには窯の後始末をしている老人がいた。

私が訪れると老人は何も言うなど私を制してから 一つの花瓶を持って来て私の目前に置いた。

「この中には 制作者のすべての怨念、迷い、そして感謝、愛が込められているんだよ。しかし創り始めにあった不純な思いは焼き上がってゆくうちに昇華されて 純粋な思いだけが作品に残るんだ。

奥さんの作品も彼女なりの愛が大きく表れているんだよ」

私は老人の話を聞いているうちに心の殻が剥がれていくように軽くなるのを感じていた。

私は老人に頼み込んで陶芸の教えを請うた。

有り難い事に老人は窯を閉めるのはいつでも出来るからといって私に付き合ってくれた。

作品が出来上がるとそこには妻が見えた、そして息子も。

私は陶芸の世界にのめり込んだ。

それから私は彼の元で 彼が亡くなる迄側にいて学ばせてもらったんだ。

5年後、彼はこの窯をお前に譲ると言い残して亡くなった。

その後は君も知っている通りさ。

もともと私は人にものを教えるセンス等ないのに、君を始め生徒達
はよく遠く迄通って来てくれていたと感謝している。

しかし病気が発症してから私は自分の思いを全て陶器に焼き込めた。
だから窯を閉め、いずれ妻の元へ行く事に後悔は全くない。

心はとても安定しているんだよ。

だから私の為に泣く事はしないで欲しい。」

彼はわたしの手を取って言った。

わたしは「わかりました。あなたは今、幸せなんですね？苦しんで
はいないのですね？」と聞いた。

彼は目を閉じたまま頷いた。

わたしは彼にまたきつとここに来るから、と言って家に戻った。

それから仕事に追われながらも彼の事を気にかけていたある日、道北の病院から電話が来た。

「容態が急変してお亡くなりになりました。あなたに渡して欲しいという荷物がありますので取りに来て下さい。」

こんなに早い彼の急逝を予想していなかったわたしは動揺したが取り敢えず道北迄車を走らせた。

わたしが到着した時は、彼の遺言通り葬儀をすることもなく茶毘に付され、遺骨は海に撒かれていた。

彼の住んでいた家の大家さんが わたしに荷物を渡した。

それは丁度大人の握りこぶし位の大きさのもだった。

包みを開けると中から薔薇色の丸い一輪挿しが出て来た。

暖かく、優しい色だった。

彼の心のすべてが込められていた。

わたしは今　その作品を胸に車を走らせている。

彼の美しい長い指、その美しい手。

そこから奏でられる音楽はどんなに素晴らしいものだったのだろうか。

しかし、今わたしが胸に抱いている薔薇色の一輪挿し。

わたしには優しい音楽が聞こえて来るのだ。彼の心の音楽が手の温もりに伝わってしっかりと焼き込まれている。

朝日がフロントグラスに差し込んで　わたしの行く手を眩しく照らしていた。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7541n/>

美しい手を持つ男

2011年10月7日10時39分発行